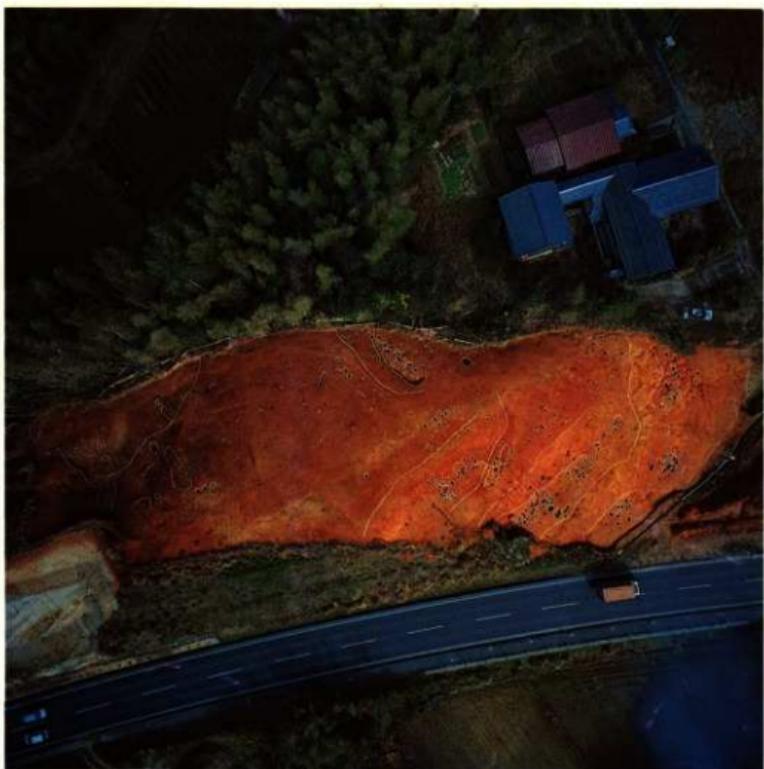


一般国道9号松江道路建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査概報
(才ノ峠遺跡)



2年3月

國道工事事務所
：育委員会

序

建設省松江国道工事事務所においては、松江地区の一般国道9号の交通混雑を緩和して円滑な交通を確保し地域社会の発展に資するため、一般国道9号のバイパスとして松江道路の建設を進めています。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ関連機関と協議しながら計画していますが、避けることのできない文化財については、道路事業者の負担によって必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

当松江道路においても、道路予定地内にある埋蔵文化財について島根県教育委員会と協議し、同委員会の御協力のもとに、昭和50年度以降現在まで5億円の費用を投じ発掘調査を実施しております。

本報告書は、平成3年度の才ノ岬遺跡調査の結果をとりまとめたものであります。本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術ならびに教育のために広く活用されることを期待すると共に、道路事業が埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ進められることへの御理解を頂きたいと思うものであります。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集にあたり御指導御協力頂いた島根県教育委員会ならびに関係各位に対し深甚なる謝意を表するものであります。

平成4年3月

建設省中国地方建設局
松江国道工事事務所長 神 長 耕 二

序

島根県教育委員会は、建設省中国地方建設局の委託を受け、平成3年度に一般国道9号線松江道路建設予定地内に所在する才ノ岬遺跡の発掘調査を実施しました。

松江道路の調査は、昭和50年度から57年度にかけて、現在供用されている2車線の暫定道路部分の調査を行い、昭和61年度からは車線拡幅に伴う部分の調査を実施しております。

本年度の調査区は、昭和55年度調査区の隣接地にあたり、10ヶ所で加工段を検出しました。この加工段からは、奈良時代から平安時代にかけての住居跡や土壙などの遺構を確認することができました。出土遺物は、須恵器、土師器、木製品、瓦などが発見され、当時の生活を知る上で貴重な資料になると思われます。特に、瓦は出雲国分寺や出雲国分尼寺と同文のものであり、才ノ岬遺跡と両寺との関係の深さをうかがわせます。

本報告書は、発掘調査の結果をまとめたものですが、広く各方面においてご活用いただき、埋蔵文化財に対する理解と关心を多少なりとも高めることに役立てば幸いです。

なお、調査にあたり御協力いただきました建設省松江国道工事事務所をはじめ、関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成4年3月

島根県教育委員会教育長

坂 本 和 男

例　　言

1. 本書は、建設省中国地方建設局の委託を受けて、島根県教育委員会が平成3年度に実施した一般国道9号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概報である。

2. 本年度は、才ノ岬遺跡の発掘調査を実施した。発掘地は次のとおりである。

才ノ岬遺跡　島根県松江市竹矢町字才ノ岬1554-14他

3. 調査組織は次のとおりである。

事務局　目次理雄（文化課長）、藤原義光（同課長補佐）、勝部昭（同課長補佐）

高橋研（文化係長）、伊藤宏（文化係主事）、田部利夫（島根県教育文化財団嘱託）

調査員　宮沢明久（主幹・埋蔵文化財第一係長）、萩雅人（文化課主事）、津森敏（兼主事）、木村直人（兼主事）

調査指導者　山本清（島根県文化財保護審議会委員）

田中義昭（島根大学法文学部教授）

遺物整理　三島千富美、菅井国江、安達裕子、板垣見知子、岡本智寿、野中佳子、深田浩

4. 本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。

SD—溝、SB—据立柱建物跡、SK—土壤、SP—ピット、SX—性格不明遺構

5. 本書で使用した方位は真北を示す。

6. 本書に掲載した「遺跡位置図」は、建設省国土地理院発行のものを使用し、「調査区配置図」は、建設省松江国道工事事務所作成のものを淨写して使用した。

7. 本遺跡の出土遺物及び実測図、写真是島根県教育委員会で保管している。



I. 位置と環境

才ノ岬遺跡は、松江市街地の南東、松江市竹矢町字才ノ岬に所在する遺跡で、水田部と丘陵及びその斜面からなっている。遺跡周辺には縄文時代から奈良・平安時代にかけての遺跡が数多く見られ、古代史を探求する上での重要地域として注目されている。

昭和55・56年の才ノ岬遺跡の調査では、奈良・平安時代の掘立柱建物跡、住居跡状遺構のほか須恵器・土師器・土製支脚・祭祀に使われたと思われる小形手捏土器や土馬が検出されている。

縄文時代の遺跡は、意宇平野の縁辺や馬橋川流域付近の低湿地に点在しており、竹ノ花遺跡・さっぺい遺跡等が知られている。また、才塚遺跡からは、石斧も発見されている。

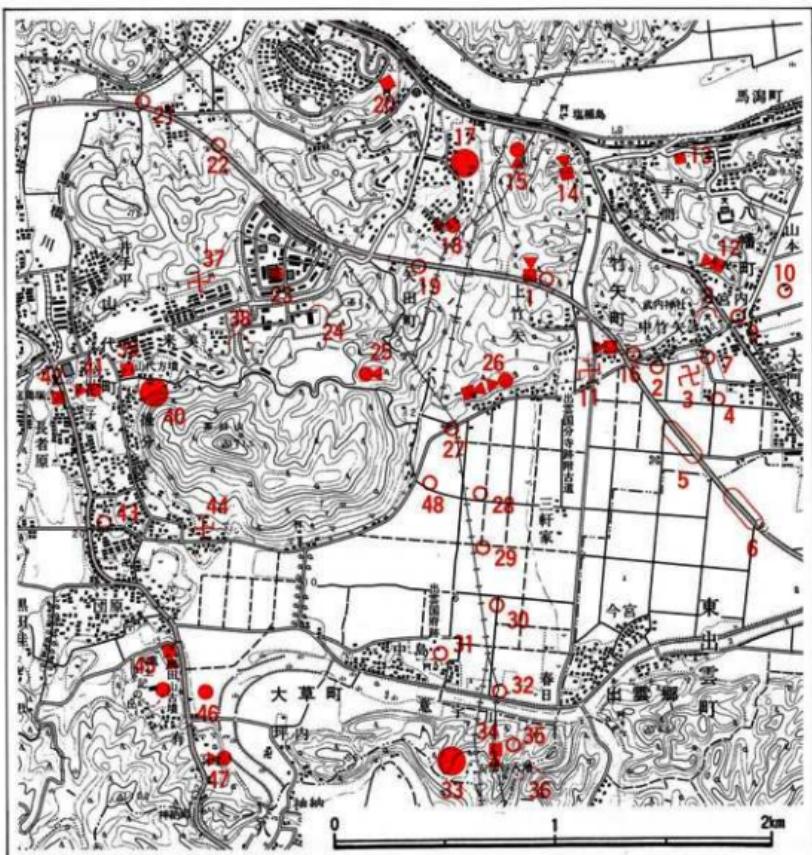
弥生時代の遺跡としては、中竹矢遺跡・布田遺跡・夫敷遺跡・上小紋・向小紋遺跡などが知られている。中でも上小紋・向小紋遺跡では後期の水田跡が検出され、布田遺跡では、前期から中期の溝状遺構を中心とする土壙や住居跡が発見されている。また才ノ岬遺跡に隣接する中竹矢遺跡では、弥生時代の土壙のほか、古墳・横穴墓、奈良・平安時代の建物跡等が検出されている。

古墳時代に入ると、中～後期にかけて数多くの古墳が築造されている。中期のものは比較的規模の大きなものが多く、前方後円墳では、井ノ奥4号墳・手間古墳などがあり、方墳は大庭鷦鷯塚・石屋古墳などがある。また同時期には、西百塚・東百塚・後谷古墳群などの群集墳も造られている。後期に入ると、「頬田部臣」銘文入り大刀が発見された岡田山1号墳や御崎山古墳などのように横穴式石室を持つ古墳や、岩屋後古墳・山代方墳のように、石棺式石室をもつ古墳が数多く造られるようになる。同時期には、意宇平野周辺の丘陵斜面に安部谷・十正免・狐谷横穴群のような石棺式石室の形態をまねた横穴墓群も造られた。

律令時代にはいると、出雲国分寺、出雲国分尼寺が造営され、これらの寺院で使用した瓦を焼いたと考えられる窯跡も残っている。また、意宇平野の南側中央付近には出雲国府が置かれ、この地域が出雲国の政治・文化の中心となった。

参考文献

『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』	島根県教育委員会	1976年
『同 上 IV』	同	1983年
『一般国道9号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書VII』	同	1990年
『同 上 K』	同	1990年



第1図 オノ峠遺跡の位置と周辺の遺跡

1. 才ノ峠遺跡、才ノ峠1号墳
2. 出雲国分寺瓦窯跡
3. 出雲国分尼寺跡
4. 宮内遺跡
5. 布田遺跡
6. 大敷遺跡
7. 平浜八幡宮前遺跡
8. 代官家後横穴群
9. 的場土塙墓
10. さっぺい遺跡
11. 出雲国分寺跡
12. 道迎寺古墳群
13. 濑山古墳
14. 竹矢岩舟古墳
15. 手間古墳
16. 中竹矢遺跡、中竹矢1号墳
17. 井ノ奥古墳群
18. 井ノ奥4号墳
19. 平所遺跡
20. 石屋古墳
21. 石台遺跡
22. 勝負遺跡
23. 来美古墳
24. 十王免横穴群
25. 鷗田古墳
26. 上竹矢古墳群
27. 間内遺跡
28. 上小紋遺跡
29. 四配田遺跡
30. 神田遺跡
31. 出雲国序跡
32. 大屋敷遺跡
33. 百塚山古墳群
34. 古天神古墳
35. 天満谷遺跡
36. 安部谷横穴群
37. 来美庵寺
38. 狐谷横穴群
39. 山代方墳
40. 山代円墳
41. 山代二子塚
42. 大庭鶏塚
43. 山代郷正倉跡
44. 四王寺跡
45. 岡田山古墳群
46. 岩屋後古墳
47. 御崎山古墳
48. 才塚遺跡

II. 調査に至る経緯

今回の才ノ岬遺跡の調査は、昭和50年度に行った才ノ岬古墳群の調査区域及び昭和55年度の暫定道路部分の調査区域に隣接する4車線の本道工部分について実施した。

一般国道9号松江道路は、6車線が計画され、昭和50年度には才ノ岬古墳群の調査が行われた。さらに、昭和57年に開催された島根国体の主要関連道路として供用するために、暫定2車線の発掘調査を昭和55・56年の2ケ年にわたって、計7遺跡（春日遺跡・夫敷遺跡・布田遺跡・中竹矢遺跡・才ノ岬遺跡・勝負遺跡・石台遺跡）で行った。

その後、昭和60年度に建設省から一般国道9号松江道路の残り4車線の本道工部分の調査依頼があり、協議の結果、昭和61年度に春日遺跡から発掘調査を再開した。本年度は、本道工部分調査の6年目であり、一般国道9号松江道路ルート内の才ノ岬遺跡の調査を行った。

III. 調査の経過

本年度の調査区は、昭和50年度及び昭和55年度調査区域の北側に位置し、東から第I～III調査区を設定した。調査面積は、5785m²であった。

第II調査区は、4月19日から表土除去を開始した。遺物包含層から須恵器・土師器・瓦などの遺物が出土したが、遺構は検出されなかった。5月20日に全景写真を撮影し現地調査を終了した。

第I調査区は、4月24日から表土除去を行い、調査の都合上、東半分について5月2日から遺構の精査を開始した。西半分については、7月15日より精査を行った。遺物は陶磁器・古銭を始めとして、石器・土器・木製品などが出土したが、遺構は検出されなかった。6月27日と8月2日に空中写真撮影を行い、現地調査を終了した。

第III調査区は、7月8日から地山確認のためのトレンチを入れ、7月15日より表土除去を行った。9月9日に地山を検出し、以後遺構の精査を行った結果、10の加工段を検出し、これに伴う柱穴494、土壙22を確認した。12月17日空中写真撮影を行い、現地調査を終了した。

調査区内の遺構・遺物を実測するため、便宜上調査区を東西方向に結んだラインに1m方眼を設定し、その基点を東南端に設け、この基点から西に向かってW0、1、2、3……とし、これに直交するラインを同じく基点から北に向かって、N0、1、2、3……とした。これにより座標を設定し、遺物の出土地点を、N—・W—と表示した。

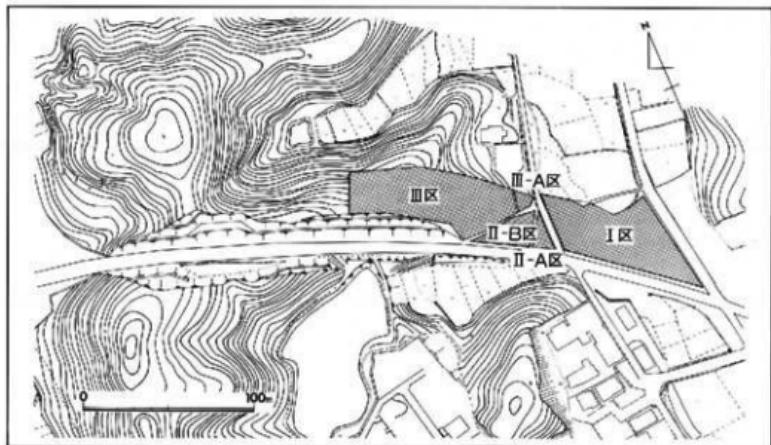
IV. 調査の概要

今回の調査では、供用されている松江道路に沿って、道路北側に第I～第III調査区を設定した。第I・第II調査区は、水田として使用していた地域で、第III調査区は低い丘陵となっている。第I調査区は、調査区域の最も東に位置する。第II調査区は、第III調査区の丘陵斜面から東へ続く谷部分に位置する。調査区のほぼ中央を農業用水路が通るため、その東側をII A区、西側をII B区とした。第III調査区は、遺跡の最も西側に位置する。丘陵部分を主とするが、東側の丘陵斜面下に谷になっている部分があり、これを丘陵部の遺構面と区別するためIII A区とした。

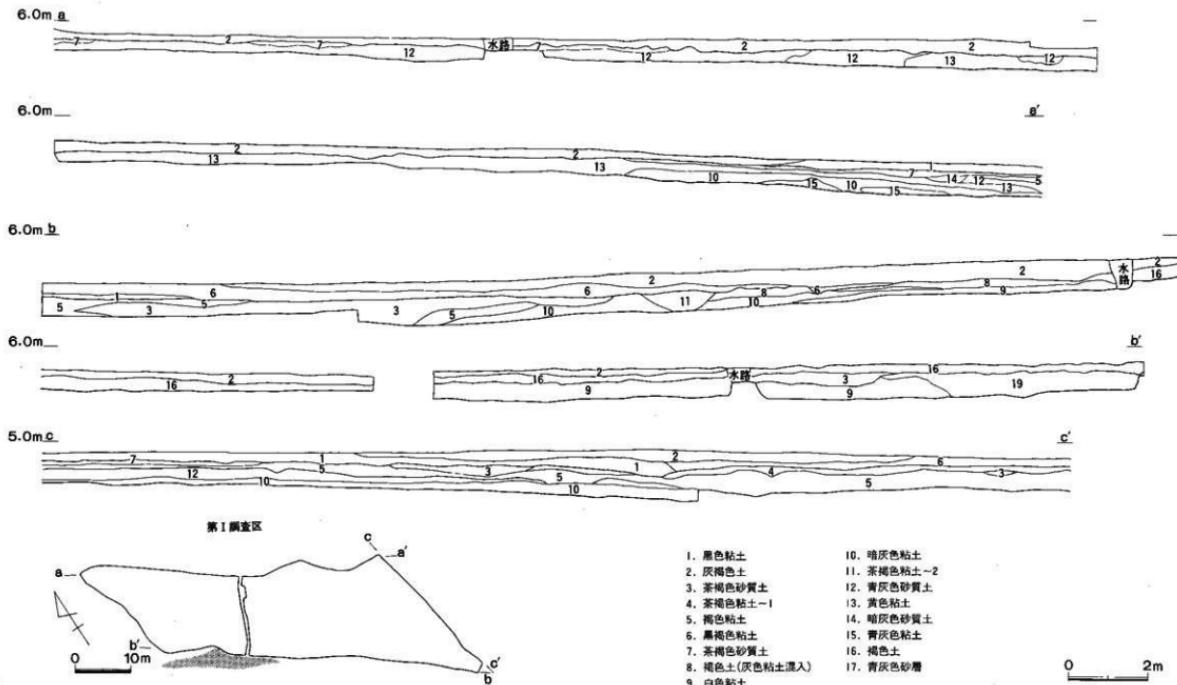
1. 第I調査区

第I調査区は遺物包含層が堆積する水田部で、西側から東側にむけながらかに傾斜している。第I調査区の土層は上層から灰褐色土、黒褐色粘土、黒色粘土、茶褐色砂質土、褐色粘土、青灰色砂質土、暗灰色粘土、白色粘土と続く。灰褐色土と褐色土の厚さは西側では36cmを測るが、東側に行くにしたがって薄くなり黒褐色粘土、黒色粘土に変化する。黒褐色粘土及び黒色粘土の厚さは、最も厚いところでそれぞれ40cm、14cmを測る。青灰色砂質土及び褐色粘土からは、多数の流木や植物が検出された。

出土遺物は、第II調査区と比較するとかなり少なめであり、東側部分を中心として出土した。遺物の遺存状況は、あまりよくなく細片が中心であった。



第2図 オノ峠遺跡 調査区位置図

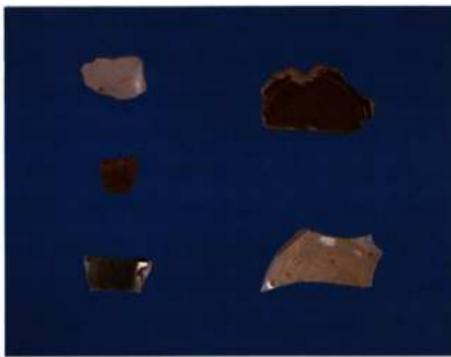


第3図 第I 檄査区土層断面図

最も多く遺物が出土したのは、灰褐色土層下の黒褐色粘土及び黑色粘土からであり、奈良時代から平安時代にかけての須恵器、土師器、瓦が中心であった。その他木製品、石器、土製支脚、手捏土器なども出土した。また、少數であるが、各種の遺物以外にも種子等の自然遺物も検出されている。

褐色土及び茶褐色土からは上記の須恵器、土師器類のほか、中世から近世にかけての陶磁器の破片、寛永通宝や元祐通宝などの古銭、鉄製品も数点発見された。

本調査区はもとは沼地、もしくは池であったと思われる。そこに粘質土が堆積し、その中になんらかの理由で遺物が混入したものであると考えられる。



図版1 第I調査区出土遺物



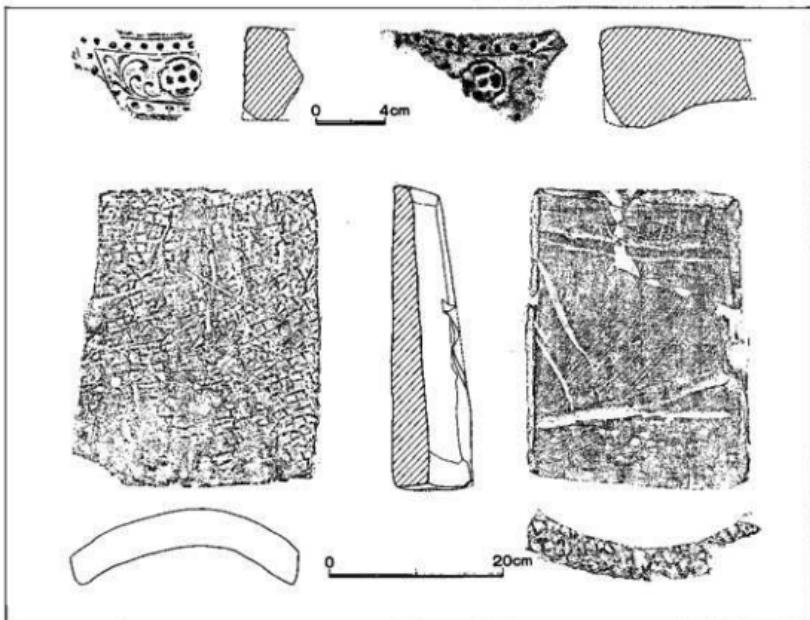
図版2 第I調査区全景

2. 第II調査区

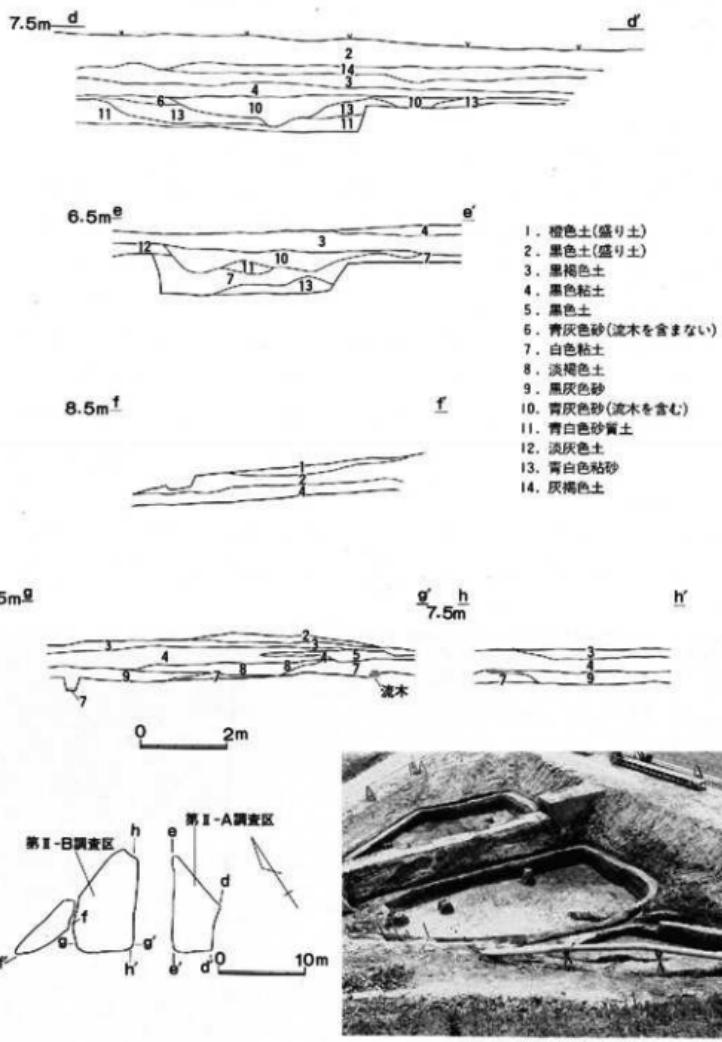
第II調査区は、第III調査区の丘陵部から続く西側が高く、東に向かってゆるやかに傾斜している。土層の基本的な層序は、上層から、黒褐色土、黒色粘土、青灰色砂、白色粘土、青白色粘質砂である。第I調査区の土層と比較すると、全体に砂層が薄く、黒色粘土からすぐに白色粘土へと続く部分もあった。遺物包含層は、黒褐色土層とこれに続く黒色粘土層である。

遺物は、須恵器、土師器、瓦、石器、土製品、手捏土器、木製品などが出土している。上層の黒褐色土層からは、陶磁器、木簡も出土したが、木簡には文字が認められなかった。遺物の遺存状況は良く、細片がほとんどであった第I調査区と比べ、原形のわかるものが多く、出土数も多かった。出土した瓦の中には、出雲国分寺跡や出雲国分尼寺跡で多く出土している軒平瓦と同文のものが數点認められた。また、土師器の破片には、竈や土製支脚、甑の一部と思われるものも含まれていた。

これらの遺物は、陶磁器を除いて、7世紀から9世紀にかけてのものと思われるものが多い。第I調査区と同様、第II調査区も、かつては沼地もしくは池であったと思われ、そこに堆積した粘質土上に、遺物が含まれたと考えられる。



第4図 第II調査区出土遺物実測図



図版3 第II調査区全景

第5図 第II調査区土層断面図

3. 第Ⅲ調査区

第Ⅲ調査区は低丘陵部と水田部からなる。水田部である第Ⅲ A 調査区の土層は、丘陵斜面から統く表土の下に褐色土、黒色粘土、青灰色粘土の順で堆積していた。このうち黒色粘土層からは、須恵器や土師器の細片がわずかばかり出土した。

丘陵部の北側と東側斜面からは、第1加工段から第10加工段まで、10の加工段を検出した。加工段は丘陵西側の北側斜面を第1加工段とし、順次東へ名称をつけた。

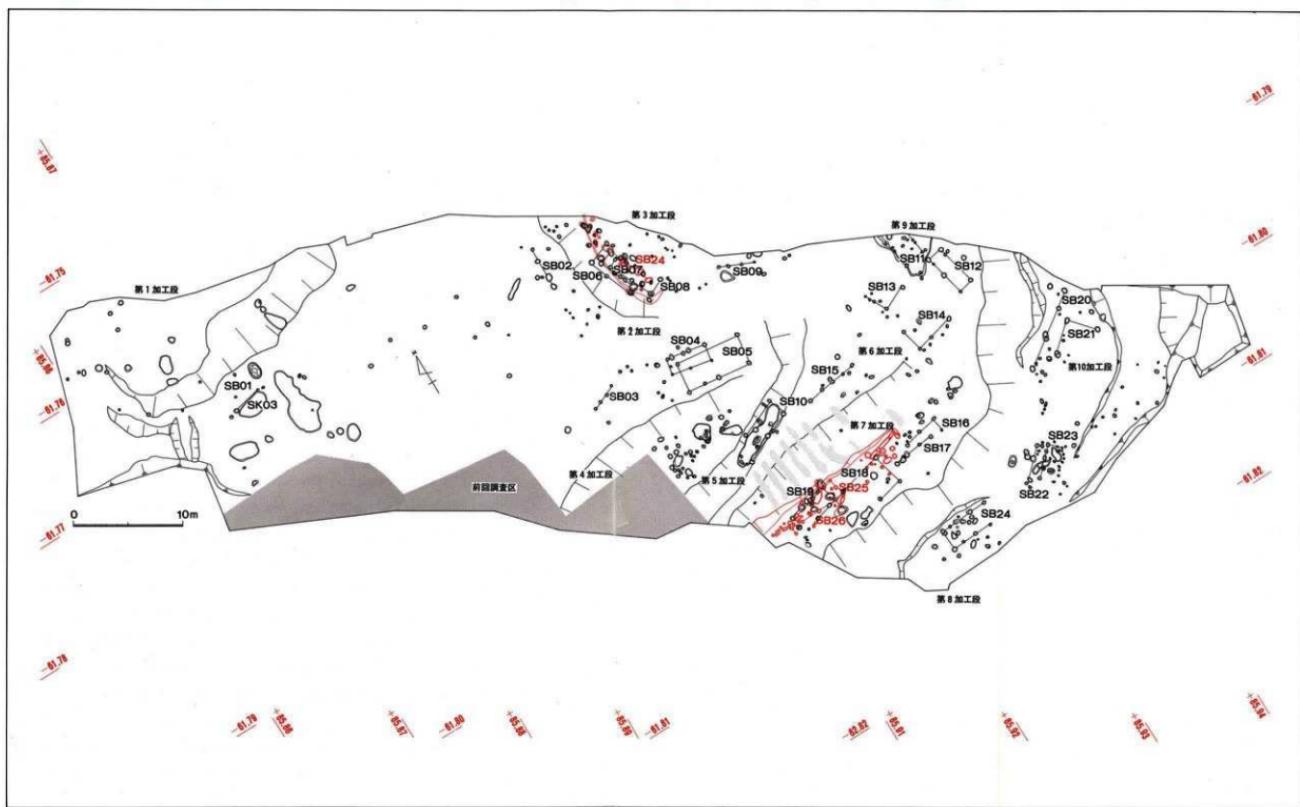
遺構は、10の加工段から、柱穴494、土壤22、性格不明の落ちこみ1を検出し、遺構面が重複する第3加工段と第7加工段に遺構が集中していた。検出した多数の柱穴から掘立柱建物として復元できたのは、SB01からSB26の26棟であった。掘立柱建物跡の多くは、斜面の下側にあたる部分が消失しており、全容を窮えるものは僅かしかなかった。

第1加工段 標高19~20m の北側斜面を東西約22m の幅で平坦に加工しており、SK03の覆屋と考えられる掘立柱建物跡 SB01を復元することができた。SK03からは、土師器の甕や甕などが出土した(第7図)。また、加工段のすぐ南側で、東西幅2.5m、南北の長さ4.2m、深さ60cmのSX01を検出したが、遺構の性格は不明である。加工段と SX01の間の狭い平坦面からは、加工段に伴うと考えられる、奈良時代後半頃の須恵器と土師器の土器溜りが出土している。

第2加工段 標高19~22m の緩やかな東側斜面で、4棟の掘立柱建物跡を検出した。規模はそれぞれ、SB02が4 m、SB03が残存長2.4m、SB04が 1.5×5 m、SB05が 2.8×6.2 mを測る。出土遺物は少量で、須恵器、土師器が検出されている。



図版4 第Ⅲ調査区第3加工段遺構検出状況



第6図 第III調査区造構配置図

第3加工段 標高17～20mの北東に面した斜面で、堆積した遺物包含層にSB06、SB07、SB08、3棟の掘立柱建物が築かれていた。各建物の規模は順に、残存長 $2.4 \times 4.4\text{m}$ 、残存長 $1.4 \times 3.8\text{m}$ 、残存長 $4.4 \times 1.6\text{m}$ を測る。遺物包含層を掘り下げた後、地山面を精査した結果、SB24を検出した。建物の残存長は、5mであった。柱穴や遺物包含層からは、奈良時代の土器が出土した。

SB09は、第3加工段の西側に位置し、残存長3.2mを測る。柱穴から、少量の須恵器、土師器が出土しており、それらの時期は奈良時代後半と思われる。また、SB09に隣接するSK10からは、奈良時代初頭の須恵器、土師器が出土している（第7図）。

第4加工段 標高18～20mの緩やかな斜面に、柱穴30余り、土壌3を検出したが、建物を復元することはできなかった。

第5加工段 標高差1m、幅2mほどの狭い平坦面に、柱穴と土壌SK14が、切りあって穿たれていた。SK14が穿たれた後、これを囲むように、SB10が築かれた様子が窺える。SB14の残存長は $1.8\text{m} \times 5.4\text{m}$ であった。柱穴からは、少量の土師器が出土している。

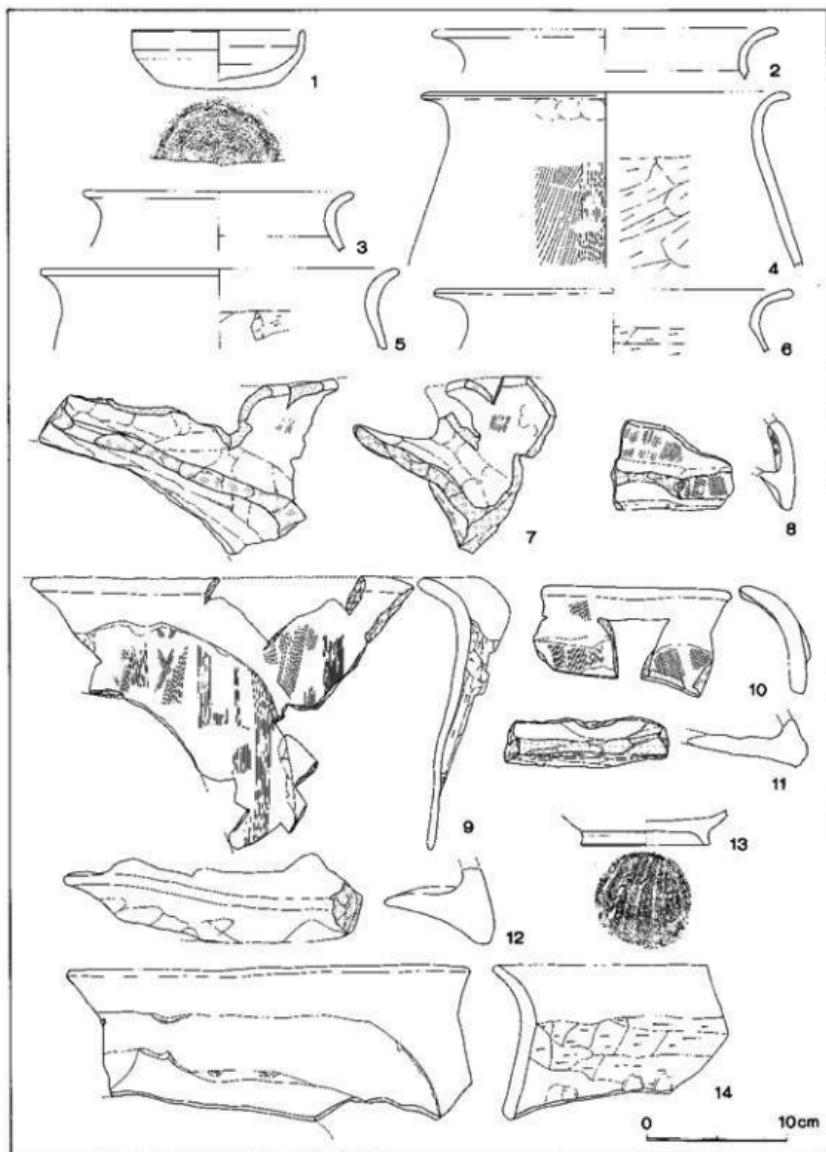
第6加工段 標高14～17mの緩斜面に、自然地形を生かしてSB12～15の4棟の掘立柱建物跡が築かれていた。建物規模はSB12から順に、 $1.4 \times 4\text{m}$ 、残存長 $2.4 \times 2.2\text{m}$ 、残存長 $2 \times 3.6\text{m}$ 、残存長4.8mであった。掘立柱建物跡の柱穴からは、少量の須恵器・土師器が出土した。

第7加工段 標高13～15mの斜面に、幅約8m、長さ約22mの広い平坦面をつくり出し、少なくとも2つの加工段が重複している。SB18、19とSB25、26は土層堆積状況から、あきらかに切り合いが認められ、SB18、19の覆土にSB25、26の柱穴が穿たれていた。SB16、17については、土層から造構の切り合い関係を判断することはできなかった。遺物は、いずれも土師器の細片が出土する程度であった。各建物の残存長は、SB16が $1.3 \times 3.5\text{m}$ 、SB17が4m、SB18が $2.8 \times 7.6\text{m}$ 、SB19が $2.8 \times 3.8\text{m}$ 、SB25が $0.8 \times 4.4\text{m}$ 、SB26が $0.6 \times 5.6\text{m}$ を測る。

第8加工段 標高9～10mの緩やかな傾斜面を削って、壁をつくる。復元した掘立柱建物跡は、SB24の1棟であった。残存長は $2 \times 4.4\text{m}$ を測る。SB24から、時期の分かる遺物は出土していないが、覆土から奈良時代後半頃の須恵器などが出土している。

第9加工段 第6加工段に隣接しており、北東斜面の地山を削って壁を作りだす。壁の残存高は、最も高いところで20cm程度であった。復元したSB11の残存長は、 $2.2 \times 2.8\text{m}$ を測る。SB11から遺物は出土していないが、覆土より少量の遺物が出土した。

第10加工段 標高9～12mの緩斜面に、SB20～23の4棟の掘立柱建物跡が築かれていた。このうち、SB20、21は、地山面を削って壁を作りだし、奥壁の残存高は60cmを測る。建物の残存長は、SB20から順に、 7.8m 、 $2.8 \times 3.2\text{m}$ 、 $1.4 \times 3.6\text{m}$ 、 $1.3 \times 3.2\text{m}$ であった。覆土から須恵器、土師器が出土しており、それらの時期は奈良時代後半頃と思われる。



第7図 第Ⅱ調査区出土遺物実測図 (1~12 SK03、13~14 SK10)

ま　と　め

今回の調査では、標高25mの丘陵部とその東側水田部から、以上のような遺構、遺物が検出された。丘陵部と水田部の比高差は、約20mである。

丘陵部では、北側と東側斜面から10の加工段と、それに伴う26棟の掘立柱建物跡、土壙などが検出され、大規模な集落が営まれていた事が判明した。加工段と掘立柱建物跡の関係については、丘陵斜面を削り出し、平坦面を構築した後、建物を建てたようである。掘立柱建物の主軸の向きは、一様ではなく、丘陵地形やそれに沿って削り出された加工段に制約されていると思われる。加工段は前回調査の加工段の位置とほぼ符合し、今回の調査結果と考えあわせると、丘陵斜面をおおむね60m~80mの幅で造成し、40棟以上の掘立柱建物跡が建てられていたものと推察される。残存する掘立柱建物跡は、1間×2間及び1間×3間のものがほとんどであるが、加工段の平坦面が欠損しているものが多く、全容が確認できる建物は、SB04とSB05の2棟しかなかった。

県内の同時代の集落跡としては、八束郡宍道町荻田団地遺跡や、鷲岐郡西郷町尼寺原遺跡、益田市大溢遺跡、松江市中竹矢遺跡、同鷹沢A遺跡、同イガラビ遺跡、同古曾志平廻田遺跡、同久米遺跡、安来市高広遺跡、同島田南遺跡、同越峰遺跡、同岩屋口遺跡、同白コクリ遺跡などが知られている。これらの遺跡の大部分の掘立柱建物跡は、1棟の建物を建てるのに必要な面積のみの加工段を構築しており、当遺跡の加工段がかなり計画的につくられていた様子が窺える。

丘陵部からの出土遺物では、日常使われたと考えられる、須恵器の壺、盤、皿や、土師器の甕、土製支脚、甕などが多くいた。これらの時期は、7世紀代から9世紀代にかけてのものと考えられ、この地に集落が、かなり長いあいだ営まれていたことを示している。また、手握土器や、土馬といった祭礼遺物の出土は、集落内祭礼のあり方を知る上で、貴重な資料になると思われる。

この他、元は池か沼であったと考えられる水田部からは、3点の軒平瓦が出土しており、国分寺跡や、国分尼寺跡から出土したものと同文であった。これらの他にも第I調査区、第II調査区からは多数の瓦片が出土しており、両寺の廐棄場として使われた可能性も考えられる。上記のとおり、今回の調査で得た成果について概略を述べたが、第III調査区で検出した掘立柱建物跡の時期や、建物の変化の様子を調べることなどが、今後の課題として残されている。

平成4年3月発行

一般国道9号松江道路建設予定地内

埋蔵文化財調査概報

(才ノ崎遺跡)

編集・発行 島根県教育委員会

〒690 松江市殿町1番地

印刷・製本 株式会社 報光社